

集英社版 世界の文学

29

コルターサル

石蹴り遊び

土岐恒二 訳

集英社

集英社版世界の文学 29

コルターサル

一九七八年一月二〇日印刷

一九七八年二月二〇日発行

訳者 土岐恒二

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三六―五

電話 (〇三) 二三九―三八二

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二五―一〇

電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六

販売部 (〇三) 二三八―二七八

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

© 1978 Shueisha



目次

石蹴り遊び

土岐恒二訳

3

向う側から

9

こちら側から

205

その他もろもろの側から

322

解説

土岐恒二

473

著作年表

487

石蹴り遊び

指 定 表

本書は、本書独自の流儀において多数の書物から成り立っているが、とりわけ二冊の書物として読むことができる。読者には、左記の二通りの可能な読み方のうち、いずれか一方を選択していただきたい。

第一の書物は、普通の方法に従って読まれ、第56章で終るものであるが、その末尾のところには煌びやかな三つ星印があり、これは「終り」という語に相当している。したがって読者は以後の続篇をなんの未練もなく放り出してもかまわない。

第二の書物は、第73章から始まって、以下、各章末に指定されている順序に従って読まれるものである。混乱したり忘れたりした場合は、下記の順番を参照するとよい。

140	50	43	36	67	146	92	60	20	14	8	73
138	119	125	37	83	29	103	26	126	114	93	1
127	51	44	98	142	107	108	109	21	117	68	2
56	69	102	38	34	113	64	27	79	15	9	116
135	52	45	39	87	30	155	28	22	120	104	3
63	89	80	86	105	57	123	130	62	16	10	84
88	53	46	78	96	70	145	151	23	137	65	4
72	66	47	40	94	147	122	152	124	17	11	71
77	149	110	59	91	31	112	143	128	97	136	5
131	54	48	41	82	32	154	100	24	18	12	81
58	129	111	148	99	132	85	76	134	153	106	74
131	139	49	42	35	61	150	101	25	19	13	6
	133	118	75	121	33	95	144	141	90	115	7

そしてとりわけ若い人たちに益し、風俗習慣全体の向上に寄与したいという希望に燃えて、私は格言や助言、教訓のたぐいを一卷にまとめてみた。それらは、年齢、身分、条件のいかんにかかわらずすべての人の精神的、世俗的な幸福に、また、われわれが現にそこに生きているキリスト教的市民国家の繁栄と秩序のみならず、他のいかなる国家または政体の繁栄と秩序にも、この世のいかほど遠謀深慮をもつて聞こえた哲学者ですら考え及ばぬほどしつくりと適合した、あの一般倫理の基本なのである。

『旧約併びに新約より抽出せる聖書の精神と一般倫理』

マルティニー神父によるトスカーナ語の、引用原典脚注付きの著述

首都のサン・カイエターノ宗団の一員によるカステイリヤ語訳

許可済み

マドリッド、アスナール社刊、一七九七年。

時候が涼しくなりはじめると、つまり秋もなかばになると、きまつてわっしは常軌を逸した不可解なあらぬ妄想にとりつかれるんで、たとえばつばめになつてあつたかい国へ飛んで行きたいとか、蟻アリになつて穴アナなかへもぐりこんで夏に溜め込んだ物を食つていたいとか、動物園にいるような毒蛇になりたいとか、なぜかつていうと蛇は暖房のきいたガラスの檻ケージなかに後生大事にいれられてるもんで寒さでかちかちになつたりなんかしないもんな、そういうことは貧乏人の身の上で起ること、高くて服も買えず、灯油はなし炭はなし薪カシはなし石油はなしで暖まることもできんのだから、それに銭もないからな、小銭さえもって出りやどこの飲屋へでもはいってけつこうなカストリを一杯注文できるしそうすりやそれでけつこう暖まることもできるんだが。もつともそんなもの飲みすぎちゃよかないよ、そりゃ飲みすぎりゃ悪い習慣になるし悪い習慣がからだに悪いのは自尊心によくないのと同じだからな。万事につけて善行に欠けて運命の坂道を転がり落ちはじめると、人間らしい威厳もへつたくれもないおそろしい汚辱にまみ

れるのを誰も救うことはできないし、誰もけつして人が転んではまりこんだ泥沼から助けだすために手を差し伸べてなんかくれやしない、たとえおまえさんがコンドルで、若かりしころは高いお山のとつべんをひと越えに飛びこえることができたにしても同じこと、いや年をとりゃ精神の発動機を失くした急降下爆撃機みたいにまっさかさまに墜落するのが関の山。どうかわっしがここにこうして書いたことが誰なりと何かの役に立って、その人が自分の行状をかえりみて後悔してもあとのもつりなんてことになりませんように、どうか自分の過失で万事がおじゃんでなことになるように。

セーサル・ブルート「吾輩がもしかくいう吾輩でなかつたら何になりたいかという話」〔セント・バーナー・ド犬〕の章)

向う側から

一国を代表しなければならぬことはあなたを人間的に扼殺するものではありません。

——ジャック・ヴァン・ブレン・ブルトンへの手紙

1

ラ・マーガと会えるだろうか？ たいていぼくが出かけてセーヌ通りを行き、コンティ河岸に出るアーチをくぐれば、すぐにも、川面に漂う灰色にくすんだオリブ色の光の中に彼女の姿が見分けられたものだ。そう、ボン・デ・ザールの片側から反対側へと行きつ戻りつしていたり、じつと付んで鉄の欄干から身をのりだすように水面を覗きこんだりしている彼女のすらりとしたシルエットが、橋の上

にくっつきりと刻まれていたものだ。そうしてぼくが、ごく自然に通りを横ぎって橋の袂の階段を登り、細腰のように幅が狭くなっている橋の上にながってラ・マーガに近づいて行くと、彼女は驚いた様子もなく頬笑むのだった。彼女もぼくと同様、偶然の出会いがぼくたちの人生においてはおよそ偶然とは程遠いものであること、ちゃんと約束をしてデートするような人間は手紙一本書くにも野の引いてある紙でなくちゃいけないし、練り歯磨きのチューブはいつも下の方からきちんと搾り出すような人間なのだと信じていたのだ。

しかし彼女はいま橋の上にはいないだろう。彼女の透き徹するような肌のほっそりとした顔はマレー地区のユダヤ人街の古ぼけた戸口を覗きこんでいることだろう。もしかしたら揚げたじゃが薯を売る女とおしゃべりしているかもしれないし、セバストポール大通りで熱いソーセージを食べているかもしれない。とにかく橋の上まで上がってみたが、ラ・マーガはいなかった。いまぼくの前方にラ・マーガの影はなかった。なるほどぼくたちは互いの噂を熟知していた。たしかにパリの不良学生であるぼくたち二人は互いの部屋を隅々まで、安っぽい彫形やけばけい壁紙の上に、さながら開いた小窓のようにブラックだのギルランダイヨだのマックス・エルンストだのの絵葉書がべたべた貼られているさまで互いによく知っていたけれども、たとえそうでもぼくたちは互いの住いを尋ねて行くことはな

いだろう。むしろ橋の上やカフェのテラス、映画クラブで出会うとか、あるいはカルチェ・ラタンのどこかの中庭にしゃがみこんで猫と戯れているところにばったり出会うほうが好きだった。ぼくたちは互いに相手を探し歩くことはしなかったが、歩いているうちに出会うことがわかっていったものだ。おお、マーガ、きみに似た女と行き逢うたびに、鋭利な刃物のような、また水晶のような休止が、耳を聳する沈黙のようにどっと押し寄せ、それがついに濡れた雨傘をすばめるときのように、寂しく崩れ縮むのだった。まるで雨傘のようにだ、マーガ、きみもたぶん憶えているだろう、いつか三月の凍てつくような日暮れごろ、二人でモンスーリ公園の崖下に生簀いばすのように投げ捨てたあの古い雨傘のことを。それをぼくたちが投げ捨てたのは、それをコンコルド広場で見つけたときそれはすでに少し破れていたのだし、それにもうそれはきみが最大限に活用したからだった。とくに地下鉄や乗合バスの中では、その傘を人々の肋骨の間にこじいれて人混みをかきわけ、いつまでもぼんやりと空を見つめて時を過ごしたり、二匹の蠅がバスの天井にえがく線を見るときもなく見つめるのだった。あの日の午後も俄雨が降り出して、ぼくたちが公園に入ったとき、きみが誇らしげにその雨傘を開こうとしたところ、きみの手から広がったのは冷たい稲妻と黒雲の破局ともいうべきしろもので、ずたずたに千切れた布が、外れて下がった骨の閃光の間に落ちかかった。ぼくたちは、ずぶ濡れになり

ながら、まるで気違いのように笑いきけ、広場で出会った雨傘は公園で尊厳死を遂げねばならぬ、ゴミ罐や道路の側溝の卑賤な循環にまきこんではいけないと考えた。そこでぼくはそれをできるだけきちんと巻いて、公園でいちばん高い、鉄道線路の上にかかる小さな陸橋のそばまで持って行き、そこから濡れた芝生の崖の底めがけて力いっぱい投げ落とした。そのとき、きみは一声、叫び声をあげたが、ぼくにはそれは漠然とながら、ワルキューレの呪いを聞く思いだった。雨傘は崖の下に沈んで見えなくなった、まるで船が緑色の波に、嵐を孕んだ緑色の波に、「冬よりも夏に手強い海」に、不実な大波に、負けて沈んでゆくように。マーガ、ぼくたちは長い間、ジョワンヴィルと公園とに恋して、濡れた樹木のように、あるいはひどくつまらないハンガリア映画かなにかの俳優たちのように、抱きあっていたつけ。そうしてその傘は草の中に、小さく黒く、まるで踏みつけられた昆虫のように横たわっていた。それはびくりとも動かず、その発条の一本とて以前のように伸びはしなかった。事畢ことつひりぬ。すべて終わった。おお、マーガ、それでもぼくたちはまだ満足しなかった。

なぜぼくはボン・デ・ザールまでやってきたのか？ 十二月のあの木曜日、ぼくはどうやらセーヌ右岸へ渡ってロンパール通りの例のカフェで葡萄酒を飲もうという魂胆だったらしい。その店ではマダム・レオニがぼくの手相を観て、不意に人を驚かすことを言ったりする。ぼくは一度も

きみを連れていってマダム・レオニにきみの手相を觀ても
らったことはなかった。たぶんぼくに關するなにほどかの
眞実をきみの手に読みとられることを恐れたためだろう、
なぜならきみはつねに恐ろしい鏡、恐るべき反復の道具だ
ったから。ぼくたちが愛しあうことと呼んでいるのは、た
ぶんぼくが黄色い花を手にとってきみの前に立ち、きみは
緑色の蠟燭を二本持ち、時間がぼくたちの顔に諦めと訣別
と地下鉄の切符の雨をゆつくりと吹きつけることだったの
だ。だからきみをマダム・レオニの店にけつして連れて行
かなかつたのさ、マーガ。それから、これはきみがぼくに
言つたから知つているんだが、きみはきみがヴェルヌイユ
通りの小さな本屋に入るところをぼくに見られるのを嫌が
つたね、あの本屋では猫背の老主人が何千枚というカード
を作つていて、史料編纂については知るべきことはなんで
も知つていたが。きみはよくそこへ行つては猫と戯れてい
たが、老人はきみを中へ入れて何も尋ねずにとどき上のは
うの棚の本をきみに手を伸ばして取つてもらうだけで満
足だった。きみはよくその店の大きな黒い導管のあるス
トールヴで暖をとつたものだが、そのくせきみは、きみがそ
のストールヴのそばに行こうとしてゐることをぼくに知られた
がらなかつたものだ。しかしこういふことはすべて然る
べきときどきに話すべきだろう。ただし、何ごとともその然
るべきときをいつと決めるのはむづかしいが。あのときも、
ボン・デ・ザールの欄干にああやうて肘をついて、酒糟色

の伝馬船を見つめてゐると、まるでこの上なく美しい大ゴ
キブリのように清淨無垢に光り輝いて通りすぎて行き、緑
色に塗つてヘンゼルとグレーテルのカーテンをしめた窓を
見てゐると、白いエプロンをした女が船首にワイヤを張つ
て洗濯物を吊るしてゐるのが見えたものだ。あのときも、
マーガ、ぼくはこうして迂回することに意味があるだろう
かと訝しんでいたのだ、なぜつて、ロンパール通りへ行く
にはサン・ミシェル橋とシャンジュ橋を渡つたほうが便利
なはずだから。しかし、もしあの晩きみが、それまでもた
びたびそうだったように、ちゃんとそこにいてくれたら、
ぼくは迂回に興味があつたと納得してゐたことだろう。と
ころが案に相違して、あのときぼくはきみに会えなかつた
ことを、迂回と呼んで貶めてゐるわけだ。あとはただ、ラ
ンバージャケットの襟をたてて埠頭沿いに行き、大きな店
がシャトレ広場まで軒を並べてゐる界限に入つてサン・
ジャックの塔の堇色の影の下を通り、きみに会えなかつた
ことやマダム・レオニのことを考えながら、目指すロンパ
ール通りへ上がつて行くだけだった。

そうだ、忘れもしない、ぼくはある日パリへやつてきた。
そうだ、忘れもしない、しばらくの間は、人のやることを
やり、人の見るものを見るというふうで、生きてゐるとは
名ばかりの生活だった。そうだ、忘れもしない、シエルシ
ュミディ通りのとあるカフェからきみが出てきて、ぼく
たちは言葉をかわしたのだった。あの午後はなにかもぶ

ちこわしだった。なにしろぼくは、アルゼンチンで身についた習慣のせいで、片側の歩道から反対側の歩道へ渡るということがどうしてもできず、いまではもう思い出せない街路のほとんど照明もしていないウィンドーを覗きこんで、たわいない品々を見て歩くことができなかったのだから。あのときばかりはいやいやきみについて歩き、きみのことを気どりで無作法な女と思ったものだが、そのうちにさすがのきみもそうしていつまでも飽きない自分に嫌気がさし、ブル・ミシユ(サン・ミシユ)のさるカフェに入ることになったわけだが、そこで急にきみは、クロワッサンを二個食べる間に、きみの人生についてたっぷりとぼくに話してくれたのだった。

それまで嘘っぱちと思われていたことが実はみなほんとうだったとは、どうしてぼくに推測できただろう。夕暮れの董色、土気色をした顔々、片隅に生きる人々を襲う飢餓と運命の転変といったものを含みこんだフィガリの絵の世界。ずっとあとになって、ぼくはきみを信じるようになった。あとになってというのは理由があつてのこと、たとえばマダム・レオニがいる。彼女は、きみの胸とともに眠ったこともあるこのぼくの手を見て、ほとんどきみが言ったとおりの言葉をばくに言ったのだった。「その娘はどこか苦しんでいるわね。いままでずうっと苦しんできたのよ。とっても朗らかで、黄色が大好きね。その娘の鳥は九官鳥、時は夜、橋はボン・デ・ザールだわ」(酒糟色の伝馬船だ

よ、マーガ、どうしてまだ時間のあるうちにぼくたちはこれに乗らなかつたんだろう)

さてぼくたちは互いに知り合つたばかりなのに、まるで人生がそう画策してでもいるかのように、次々と細かい雑用が生じていつもすれ違つてばかりいた。きみは嘘をつくことを知らない人だったので、ぼくは即座に悟つたものだ、ぼくの望みどおりのきみを見るためには、まず初めに両眼を閉じる必要がある、それから、たとえば(ピロッドのゼリーの中で動いている)黄色い星、といった最初に心に浮かんだものを思っている、するとやがて気質と時間の真つ赤な躍動が生じ、マーガ世界へのゆるやかな潜入が可能になるのだと——無器用と混乱の世界であると同時に、クレイの蜘蛛、ミロのサーカス、ビエラ・ダ・シルバの灰色の鏡などの刻印をとどめる羊歯の世界、きみがチェスのビショップ(正)のように動くことを願うルック(将)のように動くことを願うナイト(士)のように動きまわっている世界。それから当時、ぼくたちはよく映画クラブへ行つて無声映画を見たものだった。そのわけは、はつきりはしないが、ぼくにもぼくなりかの教養があつたからで、きみは憐れ至極にも、きみの誕生に先だつあの激しく引き撃つた黄色い絶叫、そこを死んだものたちが流れたこともあるあの縦溝の中の乳状液については何ひとつ知らなかつたのだ。しかし、不意にハロルド・ロイド(アメリカの映画俳優。キートンとともにドタバタ喜劇の一代を築いた。一八九四—一九一九)がそのあたりを通りかかると、そのとききみは夢の水

を払いのけて、結局みんなとてもよかった、パープスト
(ゲオルク・ウィルヘルム・オーストリ
アの映画監督。一八九四—一九六七)
生れのドイツの映画監督。ナチスを逃がれ
て一九三五年アメリカへ移住。一八九〇)
もよかったと納得したの
だった。気がいったのが見づからなければいつまでも破れ
靴をはき、この程度なら我慢できるといったものを頑とし
て受けいれないきみの完璧主義にはいささかうんざりさせ
られたものだった。オデオン² 辻でハンバーガーを食べた
り、自転車でモンパルナスへ行ったり、どこのホテル、ど
んな枕でも構わなかったものだ。しかしまた別の折りには
オルレアン門まで出かけ、その都度、ジュールダン大通り以
遠の未整理地区についていろいろ知るようになった。その
界限では、ときどき真夜中に「蛇のクラブ」の連中が集
まって、はなはだ矛盾した存在だが、盲の見者と話をして
いることがあった。ぼくたちは自転車を路上に置いたまま
もう少し奥へ入りこみ、その界限は空のほうが地上よりも
貴重な、パリでも数少ない土地のひとつだったので、立ち
どまって空を見上げたりした。ごみの山に腰をおろしてし
ばらくのあいだ煙草を吸っていると、ラ・マーガはぼくの
髪の毛を撫でたり、誰が作ったでもないメロデー³を
鼻唄で歌ったりするのだったが、そのたわいない口遊みも
溜息や思い出で途切れがちだった。ぼくはそうした間合に
乗じて由無し⁴ことを思い浮かべるのだったが、そういうや
り方は何年前か前に入院中に始めたことで、そうやるたびに
それはますます実りの多い、欠くべからざることにように

思われてくるのだった。非常な努力をして、もろもろの副
次的な形象を結合させたり、匂いや顔などを思い浮かべた
りしながら、ぼくは一九四〇年にオラバリア(ブエノスアイ
レ)で履いていた一足の栗色の靴のことを、完全な忘却からや
つとのことで引き出した。あの靴はゴムの踵^{かかと}と非常に薄い
底革がついていて、雨が降ると水が魂まで浸透してきたも
のだ。この靴を記憶の手に持ちさえすれば、あとはなんでも
記憶に蘇ってくるのだった——たとえばドニャ・マヌエ
ラの顔とか、詩人エルネスト・モロニとか。でも、その回
想ゲームは、取るに足りない些細なこと、驚くにあたらない
こと、忘れ去られていたことばかりを取り戻すことにあ
ったから、ぼくはその靴を手にすることを拒絶した。そう
して、どうにも思い出すことができずに身を震わせ、想起
の遲滞を企む蛾^がの攻撃にさらされながら、時間に接吻して
しまった愚かなぼくは、結局その靴の向う側に、ブエノス
アイレスで母に貰ったソル(太陽)印の茶の罐を見た。それか
ら小さな茶匙、黒い小鼠どもが水盤の中でぶくぶくと泡を
吹きながら生きたまま激しくのたうちまわっている鼠捕り
網。記憶というものは、たんにアルベルチヌたちや、愛
情と下腹部の大きいなる日誌のみならず、すべてのことをと
どめているものだを確信して、ぼくはフロレスタで、ぼく

* ベドロ・フィガリ、一八六—一九三八。ウルグアイの画家。
ラ・プラタ流域のクリオリヤの生活を印象派ふうのタッチで描く。
パリの近代美術館に「クリオリヤの踊り」がある。

の勉強机にいられておいた品々を、ゲクレブテンという名の
どうしても思い出せない娘の顔を、五年生のときのぼくの
筆箱に入っていたペンの本数を、脳裏に再現することに執
念を燃やしたものだ。だが、そんなふうにして震えながら
絶望してやめてしまい（というのは、それらの小さなペン
をどうしても思い出すことができなかったからで、それら
が筆箱の中、特定の仕切りの中に、ちゃんとあることはわ
かっているのに、いくつあるのかは思い出せず、またそれ
らが二本なり六本なり入っている正確な時を確定すること
がどうしてもできないのだった）、そのうちにラ・マーガ
が、ぼくに接吻したり、煙草の煙と熱い吐息をぼくの顔に
吹きかけながらぼくを現実へ引き戻す、そうしてぼくたち
は笑い、またそろあのかラブの連中を探してゴミの山の間
を歩きはじめるのだった。そのころまでには、探求こそぼ
くの運命であり、これといった目的もなしに夜間散歩者の
象徴であり、羅針儀の掘殺者の道理であることに、ぼく
は気がついていった。ラ・マーガとパタフィジック（アルフレ
ヤリの造語。一種の疑似学）について話しているうちに、やがて
ぼくたちは飽きてしまった。なぜなら彼女の場合もまた
（ぼくたちの出会いがそうだったし、多くのことは燐寸の
火のように暗く臍ろで儚いものだったが）絶えず異例の事
態に陥ったり、人間のためのものではない小屋に押しこま
れたりという目に会ってきたからで、しかもそれで他の誰
を蔑むでもなく、自分たちのことを安手のマルドロールと

も、特権的に歩きまわるメルモスとも思っていないかった。
ぼくは、螢がこのサーカスとしての世界のもっとも臆目す
べき驚異であるという争う余地のない事実から大いに自己
満足をおぼえているなどとは思われないが、にもかかわらず、
意識というものの存在さえ措定すれば、この光る虫はその
小さな腹部に光をかきたてるたびに特権意識をくすぐられ
る思いがするに違いない、と理解することが出来る。ラ・
マーガもちょうどそれと同じように、彼女の人生において
規範が正しく発動しないためにつねに彼女を巻きこんで
た嘘のような纏れに魅惑されていた。彼女という女は、そ
の上を渡ただけで橋を壊してしまふような女、あるいは
五百万宝鑑の当り籤をついさきほどどこかのウィンドーの
中に見たばかりだったことを思い出して大声で泣きだすよ
うな女なのだ。ぼくはというと、少しぐらい異例なことが
身にかかることにはすでに慣れっことになっていて、たとえ
部屋に入って暗闇のなかでレコード・アルバムを手取る
とき、よりによってアルバムの背の中で眠っていた大きな
図体の生きている百足が、掌の上を這いまわるのを感じて
も、あまりごわいとは思わなくなっていた。そういうこと
のほか、シガレットの箱の中に灰色か緑色の大きな糸く
ずが入っているのを見つけたとか、機関車の汽笛が、その
間合いといい調子といい正確にルートヴィヒ・ヴァン・ベ
ーリートヴェンのある交響曲の一節と、職権をもって合致す
るのを聞いたとか、あるいはメデイシ通りの「公衆便所」